詩歌の本棚 新刊評

詩集　河津　聖恵

『二十歳の原点』の作者高野悦子さんが亡くなって今年で半世紀。栃木の詩誌「序説」第26冥所収のエッセイ高橋一男「京と（6）」を読んで気づいた。故郷が栃木だったことも。同時代に青春を送った高橋氏は「永遠の憧れの対象」の残像を追い、京都の街を電動自転車で巡った。

『二十歳の原点』は、自作詩や詩への言及が各所で目を惹く。詩が生死の間を揺らぐ彼女の救いだったのだとあらためて知る。詩とは何かを鋭く突きつけられるようだ。「ノート」を締めくくる詩の、深夜の湖に裸身を浮かべて眠る心象風景は、余りにも美しい。

鎌田東二『夢通分娩』（土曜美術社出版販売）は、昨年刊行の第一詩集『常世の時軸』（里潮社）に続く「神話詩集」第二弾。作者は『常世』で世界創生への祈りを込め、この世の果ての光景を描いたが、本詩集では生死を貫く深層意識での旅を『夢通』と名づけ、夢の展開によって常世のヴィジョンを次々獲得していく。神話には構造的な物語というイメージがあるが、ここでは空虚のただ中にさらされる者の苦悩と歓喜によって、壊れては生まれるヴィジョンが不連続に織りなされる。この詩集にうごめく闇は『二十歳の原点』の詩世界と、深く繋がるようでもある。

鎌田東二『夢通分娩』

「ひろがっているのは／どこまでも開放しつくされている天の穴と地の穴の／ふたつ／その二相を両眼としてきみは視る／みえないものを／みえるものをくいやぶって／ほとばしる線をかじる／／分度器90度の悲嘆／沸騰する補助線／／さわぐな／翁顔の笑顔の中に／とてつもない暗黒星雲／すべてを吸い込んでなおとどまることのない／負の永久音叉がかそけくとどく朝まだき／きみはいさぎよくひとりで逝った」（「猛雲」）

竹ノ一人『哩』（加里舎）は、表題（「マイル」）が表すように「距離」がテーマ。作者は「哩」の漢字と語感に惹かれたという。「ひらがなの〝まの遠い感じと、〝る〟という着地感。どこかに起点を置きたい気持ち、帰巣願望のようなものを、知らず自分のなかに持っていたのかもしれません。」また距離とは「引かれあう距離、反発する距離、交錯する距離、ただあるだけの距離」というように、それ自身の命を持つと作者は考える。遊び心のある仕掛けが風通しの良い詩集にしている。

「用心深い恋人のように／忍び寄り／ささやく葉ずれの旋律で／ひとを結わう／／わずかなあげさげ／ゆりもどし／どこまでつれていかれたのやら／なにをわすれてきたのやら／足音がさり／千畳敷にひとり／天人たちは／やおら欄間へ戻っていく／／旋律がほどけても／なお臨界のまま／おんたなごころのくぼみのなか／ハミングの漫遊がつづく」（「声明―東本願寺御影堂」全文）

秋川久紫『プラグメント　奇貨から群夢まで』『港の人』は、経済、会計、IT用語を「半ば強引に詩の構成要素の中に引き摺り込」み、音楽や美術や抒情と異種混合した「詩的断片」集。経済システムの「荒波に対する個の内面からの抵抗の姿勢」が、異物の混在を煽めくアフォリズムと独白へ昇華させた。

「【唐鬱子】俺たちが鎮魂歌を歌うか否かは別として、死者の傍らに異界の獣さえ侍らせておけば化学変化が起きるだなんて、いくら何でも浅薄過ぎるんじゃないのか？」

「【麒麟】オフィシャルに出来ないリスペクトを抱えて、焔の中を恥け続けること。月の光に恋情を含ませ、波濤の形状と相似をなすことを意図して踊り続けること。」

（詩人）

独特の言説世界 つむぐ神話詩集

夢通分娩

鎌田　東二著

ジャンルを超えて活躍する宗教哲学者による「神話詩集」。『常世の時軸』に続く第2弾で、今年9月には完結編となる第3詩集『狂天慟地』を出版する予定。

2018年11月から今年4月までの作品26編を収録。「破ることのできない判決を切り裂いた古代文字　鼠がもんどりうって走り込んでいく海に送信された」（神剣）、「夢通生死海変異開闢。卵生質朴夢海童子は電子レンジを抱えて覗き見た。海の向こうに何があるか。秘密曼荼羅生死海の果て。渦巻く潮。泡立つ御霊。三千世界一つひとつの宇宙繚乱」（夢海童子）、「修理固成のその先に　矢車剣之助いざ見参　行こう　天の岩戸を抉じ開けに　暁烏のトビウオといっしょに　どこまでもどこまでも　虚空開闢　新事記のお筆先のままに」（海月なす漂へる国）と独特の言説世界が展開する。

合理的解釈を拒否するような言葉がつむぎ出されて、もがきあえぎながら絞り出される叫びのようだ。しかしながらその内容は、宇宙の混沌とその中から結びなしてくる生命の神秘、人が生きていく上で逃れることのできない罪業や孤独、そして拠り所として求めざるを得ない全ての原始と、人類が何千年とテーマとしてきたもので、まさに神話であり、現代のお筆先といえるだろう。

本体価格2000円、土曜美術社出版販売（電話03・5229・0730）刊。